

人間談話〈2〉



周 郷 博

◆ モンテッソーリ

ぼくは、去年ロンドンで買ってきたモンテッソーリの本を読んできました。十年前にも買って大変感激して読んだけれども、あのころ、よく電車の中で読んだものです。電車の中で字引出して読んできると、変な顔して見るやつもいる。あの年して字引なんか見て……。 (笑い) 感心する人もいます。こないだなんか、一生懸命読んでいたら「あなたはこの読んではわかるんですか」というんだね。「うちの子どもは英語の勉強しているんですけれど」なんて……。 (笑い) そのうちにばかにむこうは親しく、親しむ感じなんです。なにしろ一生懸命やっていると、

むこうは安心だと思わね。なんでも一生懸命やってくれる方がいいじゃない？ なんかこう、策略で、えらいような顔して人に命令なんかばっかりしようと思うと、みんな逃げちゃうからね。そういう人、今、日本には多いんですから。

ぼくは十年くらい前、よく絵をかいてました。木をかきたくて、一生懸命かいてました。今はその神宮外苑は、垣根ができちゃいましたけどね。かなり長い間垣根がなくて、森の中へはいれたんです。木はね、夕日にあたってるとまたきれいなんだ。つぎに行ってみると、木が、こないだのようにきれいなんでね、日本語でいうとなんだか気味が悪いんじゃないかと思われると心配でね、英語で、木にこういうんです。「お前は、

このまえはもう少しきれいに見えたはずだけどね……」これ、日本語でいったら気持ちがだと思われちゃうからね。(笑い)

「きょうは、なんだかお前はさびしそうじゃないか」なんてね。そういう話してるものだから、「この大学には木と話のできる人がいて、それは周郷先生だ」なんてある生物学の教授が学生たちに話した、ということをや聞きできかされました。

そこで、木を一生懸命かこうと思ってるでしょ。そのころは小学生みたいのが、森の中をかけずり回ってきたないかつこうして、あばれていたんです。そして「あ、絵をかいてるんだな」なんていって、三人ぐらいこう集まってくるの。ふしぎなことね、この子たちは、この人は信用できると思うんだな。ぼくの腰にだきついたりして「どんな絵かいてるの」なんていって……。それから、ぼくが消しゴムを出して消したら「消しゴムで消すのは本当はいけないんだよ」などと、子どもに注意されたりしましたね。

それは、実にいろいろ思い出があるんだけど、あそこにコーヒーを飲むところがあるんです。そこにおばさんが一人いて、そのおばさんがタバコを一本くれました。ぼくをかわいそうだと思ったのかもしれない、よっぽどかせぎがなくてさ。(笑い) というのはね、二週間か三週間たって、またそこへ行って木を

かこうと思ったんです。とそのおばさんが中から出てきて、「今度はかけましたか」なんていうんです。ああいう親しさっていうのは、どうして起こってくるんだろうね。それはやっぱりなにか一生懸命やってるっていうことですよ。教師だってそうです。「私は知ってるけど、お前は知らないだろう」なんてことでは、もうついてこないんです。

どうしてこんな話になったんだっけ。そうだ、字引だね。わからなかったら知ったかぶりしないで字引きひかないとわからない。電車の中でも恥ずかしくないわけです。

それで、モンテッソーリですが、最初に書いた本、英訳ですが「教育的人間学」という本で早稲田の図書館にあることがわかりました。ぼくはそれをプリントしてもらってもってきてもらいましたが、モンテッソーリだって、敗戦直後にインドのカルカッタで出した「The secret of the children」という「子どもの秘密」って鼓さんが訳した、あれを読みました。が、よくわかりません。敗戦後の教育にばかりこだわっていたんじゃない、つまり現代のことばかりにこだわって、そしてなんか視野が狭くなっちゃいけないんですね。だから、日本

の過去のことも思い出さなきゃいけないし、ヨーロッパの十九世紀やもっと前の人の考えも、ずっと前の人の考えも、むしろロシアなんかみたいな時代の人の考えもね。聖書の言葉だって、今本当に生きているという感じがあります。聖書の中にもぐりこんでしまってもいけない、今の時代も必要なんです。しかし、人類の過去において考えたことは今の人たちよりもっといいことを考えているんです。

モンテッソーリを読んで、それはコーリッジの言葉でいうと、本能というふうになるんですけれど、それを考えました。それからワーズワースという詩人で哲学者、ぼくは、ワーズワースが昔から好きだった、十代のころから好きだったんです。最近イギリスへ行つて、*The music of humanity*、という、あのプレリウドなんかよりもっと前、初期の詩を読んで、もう非常に感激したんです。その本の名前です、*The music of humanity*、いい名前じゃない？ 大体名前だけでも、ほれほれするな。human 人類だよ、人類というものの music ですよ。それが詩なんだけれども、これは大体、本能というふうになるんです。

モンテッソーリは、*mental form*、というんです。子どもには特殊な *mental form* があるんだ、というのです。子どもには

特殊な characteristic 特徴があるんです、おとなと比べたら。そしてそれは、本能というふうに呼んでもいいんです。そしてこれは、子どもの時期に出てくるんで、時期を失ってしまうえば駄目になっちゃうんだ。この時期でなきゃ駄目なんです。生まれのままの子どもの自我というのは、おとながもっている自我と違うんです。いわゆる自我っていうのはありますよ、だからオッパイに吸いつくし、食べ物にもよってくるんです。しかし子どもには、特殊な characteristic 特徴があつて、それは自我というものからぬけ出していくんです。人間性 *instinct of our human nature* 人間がみんなもっているものですけれども、子どもだけがもっている特殊な本能っていうものがあつて、自分からぬけ出していくという本能、だったんです。

そして、自分でぬけ出していくんですから、まゝ仏教でいえば、餓鬼の状態を自ら克服して、自我の上へ出るという本能をもっている。もっと別な言葉でいえば、生まれのままですべて、栄養ばかりつけていくことを考えていたら、人間になりそなっちゃう、でもだれにも強制されずに子どもは自分の自我というものをぬけ出して、人間らしいものになる、という本能のよいうなものをもってる。これが子どもの特徴だというんです。これは、外から強制しちゃう駄目なんです。

モンテッソーリにいわせると、六歳前の子どもの中には、何か一つ *mental form* というものがあるというのです。これはおとなになればなるほど消えちやう……。この時期をいいかげんに過ぐすと、人間になりそこなっちゃうんです。「三つ子の魂百まで」だって、意味づければそういう問題なんですけどもね。あの幼少な時期に、人から強制されなくても小さな自我というものをおこえて、人間らしいものを身につけるということが子どもたちの本当の欲求なのですね。

戦後は、食わせておいてあとはほったらかしておく。と、精神的なものー子どもが自我のからからぬけ出そうとして表わした精神的なものは、あらわれてこない。子どもを変なおとなみたいなものにしてきたのですね。

奈良の岡先生は、これは全部教育が誤っているから、もう一度みんな五歳に戻ろうじゃないか、といっています。しかし、生命というものがもってる特殊なものは、逆もどりでできないっていうことなんです。元に戻るのには何十倍も大へんなのです。そしてモンテッソーリによると、子どもはある幼少な時期に非常に速く育っていくことがわかります。大きくなって、ある年齢になるとちつとも育たないでしょ。育たないで、だんだん欲ばかりになっちゃって……。だからその意味では成長するとい

うことはつらいことです。成長しないでいたいけど、世間がうるさい。

この幼児、幼年期特有のその *mentl form*、それがあらゆる人間がやっている教育の仕事の、英語だと *real pivot* というのは、コマの軸です。コマが回っている、それが人間がやっている成長教育です。人間は教育をしなければ駄目なんです。しかしやりすぎちゃいけない、へたな教育はやらないほうがいいのです。幼年期に人間の子どものだけがもっている *speial mental form* というものがある。何かを求めて、人間になりたい、自分で成長しようと思っっているのです。この時期に一人の人格というものができてくるのです。そしてこれが人間がやっているすべての教育の *real pivot* になるんです。コマの軸、主軸になるんです。軸がなければコマは回らないのです。コーリッジが本能とよんだもの。モンテッソーリが *mental form* とよんだもの。これは、その子どもの六歳以後のものともちろん違いますが、おとなのものとも違うわけです。だからおとなのおしつけはいけない。赤ん坊として生まれる。子宮から出てきた時期にさかのぼって、おさない子の中に、もうそれは鮮かにあるもの……。おとなはもう忘れちゃって、わからないものですね。

違う言葉でいうと、*absorbent mind* っていうんです。ab-

sorb っていうのは「ずーっとはいっていく」んですね。じっと見てるでしょ、あれが absorbent mind っていう、小さな子どもがじっと見つめる、あれです。今の日本の子どもたちがせかせかしているっていうのは、あれは子どもらしくありませんよ。じっと見る、あ、くもがあんなとこに動いてるとか、アリが歩いているあとをずっと歩いてみたり、これはおとななんかとてもやれないことです。するとすればなんか目的があるんです。：目的なんかなしに、じっと見てるのですね。それは世間でいってるような dry learning 味もそっけない学習とは違うんで、「自発的にやってる」のです。モンテッソーリによると、それは、勝ち誇った人間らしい人格の最初の出現なのです。人に助けられてやったのではなく「自らかちとった」「勝ち誇った人格」「ほかの人格と比べることのできないもの」なのです。そして、これがその一人の人間の教育のピヴオット (pivot) でもあるけれども、同時に一生涯にわたる一つの人格というものの基もとがそこにできるわけです。

子どもの世界なんか見えていて、あ、これだなと思いたるものがあるに違いないんですよ。そしてそれは、人の一生涯を通じて一回限り起こるところの、「自発的な」「自己訓練」(自己教育) なのです。自分で自分をつくっていくという訓練を、

自分に課しているのです。そして自分を、自ら人間らしいものに作りあげているわけです。それが、人間の生理的・心理的な土台になって、一人の人間の生涯を通して現われる人間的能力の基本、基調になるのです。

‘absorbent mind’ というのは、「目」だけで起こっているんじゃないんです。「手」も参加するし、「歩くということ」によって見る世界がもっと広がりますね。足を使わなきゃ駄目なのです。それから「じっと聞き入る」ということはいっています。おかあさんの話を、聞いてないようだけどじっと聞き入っているのです。その「手」と「足」と、それから「タッチ」、「触れる」ということもです。触れることについていっても、ただ触れるだけじゃないんだな。「タッチ」ですよ。「タッチ」っていうのは、一つの、このリズムを感じることですからね。こうして、自分でも意識しないで一つの性質、その子にふさわしい、その子が人間らしくもつべき character、ある種の品性っていうのかな、品性がここにできてくるのです。

◆ コーリッジ

こういうのは、モンテッソーリは子ども達の魂のかくれた部分——神秘的なものですよ——だと考えたのです。で、もう一

つ、三歳から六歳までの幼児がもっている本能みたいなふしぎなもの、それについてコーリッジがいつているのですが、今の日本の教育はこの幼児を冒しているんじゃないか、と思います。

‘hidden part of the soul of the child’ (子どもの魂の目に見えない部分) なんですから……。しかしこれが大事なんです。植物が育つ時、そう思わないでしょうか？ らっきょうをずうっとむけば、中が何もなくなっちゃうっていうけどね。

「あの何もないところ」これが大事なんです。 「何もないところ」から「何かが出てくる」っていうのふしぎに思わないかしらね？ ここから芯が出てくるしね、花が咲いてくるしね。これ神秘的ですよ。

コーリッジは、それは子どもの becoming、子どもの生成だとみるのです。自分をつくりあげていく。これは宇宙の生成みたいなものです。この中には特殊な instinct みたいな特徴があって、それは人間性のうちで最も初期に出てくるもので、いわゆる自我をこえて自らをつくりあげていこうとする特徴で、それは本能みたいなものです。つまり、「子どもの中からわき出してきているもの」ですね、外からあんまり手を加えずぎると、くさっていくとか……さ、子どもの中に健全に育たなくなっちゃうわけでしょう。コーリッジのいうには、子どもっていろいろ

は、おとなが考えているほど、食い気なんていうものに支配されてないんだ、と。おとなは、自分の食い気をもとにして子どもを解釈するけど、あれは間違っている、というんです。ここ、わかるでしょうか？ 「子どもだった時分ほど、多くの人間は人間的であったことはない」と彼はいう。ほくも本当にそうだと思います。おとなになると、だんだん人間的でなくなってくるんです。悲しいことだけれど……。小さい子どもは、おとなに比べてはるかに食い気に支配されていないし、おとなよりはるかに想像力において自由であると。おとなは想像力なんていったって、想像力がちよつとにごつてるから。

心理学の本に書いてあるけど、Imagination っていうのは二種類あるでしょ、一つは、人のあらをさがすとか、嫉妬するとかね。これも、やはり Imagination です……。病的な。あの人は本当は変なこと考えてるからあんなことやってる、世間では何とかかんとかよくいつてるけど、あの人はいやらしい人間なんだ、なんてそんな想像力を働かせる……。子どもはそんなことをしません。それは「不自由な」(とらわれた)想像力でしょう。……ところで、子どもの世界は道德的な世界だということです。なにもおとながいわなくたって、ほんらい道德的です。まわりにいるおとなが不道德だから不道德になっちゃうんで、本来は

子どもは道徳的な生き方をしてるんです。おとなははるかに正直じゃないんです。子どもは、その正直さというのも、激しい正直なんだというのです。これ、実感として思い出せるでしょう……。ぼくだって子どもの時は、激しく正直でした。だんだんこう世になれてきたが、これは間違っているという時は、損とくで相手の気持を考える必要ないんです。不快だといえば、本当に不快なんだ。だからそれは *fiereest honest* っていうんです。 *fiere* っていうのは激しいんです。決して譲歩しない正直さっていうものをおとなよりもってるんです。そして、この子どもの *moral lie* (道徳的な生) というものは、信仰といっちゃっていいかどうかわからないが、何かそれに近いエネルギーなのですね。生、つまり信頼ということによって力づけられるのです。まわりが信頼できなければ、この子どもの本性は駄目になるのです。まわりが信じてくれる、うけ入れてくれるという状態の中で、エンリヴン (*enliven*) される *moral* なのです。その生氣をもっと与えられ強められるという意味です。このことは、今の日本の状態と非常に関係があるでしょう、おとなが信頼できないもの。子どもの目から見てもらんなさい、なんかこの *moral* がこわれちゃってしまおう不安があります。せつかく神様が与えてくれたこの *moral* な子どもの世界は、お

となによって小さい時にこわされるのです。信頼できない、意地悪なおとながまわりにいるのだから。口ではお上品なこといってるけれど、本性は意地悪なやつなんだな。子どもは見ぬくのです、すると *faith* 信頼がもてない……*moral* はこわれてしまいます。

最後にコーリッジの詩の話をします。ひばりはどういふうに鳴いてるかかっていうあの詩、ぼくは好きなのです。一番最後に、ひばりはこういふうに鳴いてるんだっていう……

I love my love, my love loves me, これ、調子もいいでしょう。で、品が悪くないでしょう。私は、私が愛する力をもっているということを愛しているんです……そうですね。 *I love my love,* それだから花の美しさもわかるんです。 *my love* はつまり美しいものは美しいと見えるということ、そういう私を私は愛している……。自分を愛してるんじゃないんだ。そして *my love loves me* っていうんです。私が愛してるっていうこと、私が愛しているものを私は愛しているんです。花がきれいだと思うたら、本当に無心に花がきれいだと思うていれば、花もぼくを愛してくれます。それをひばりのなき声で表わしたわけです。 *I love my love, my love loves me,* これ覚えておくといいでしょ。

先生と生徒だっそうです。ひばりのようでなきゃいけないんです。ひばりを見ていてごらんさい、上の方にずっと上がって行くでしょう、声の時々変わったたりなんかして。雲の中までついていっちゃうのね。この間見ていたけれども、あれ何やっつてんだろうな、雲の中まで行って。先生だっ子どもを本当に愛すれば、むこうも愛してくれるんですよ。花だっ何だっで、こっちが本当に愛していれば、むこうは愛してくれるんですよ。ハーバート・リードもそういう言葉をいったけれど、愛するということは愛されているということなんだと。そりゃ、そういうふうにならないのは、愛し方が間違っているから、私欲があるから。

これでおしまいにしますが、ぼくは、innocence 無邪気っていうのはどういうことかもいいたかったんですけどもね。このコーリッジの解釈は実にいいです。センチメンタルなことじゃないんです。ぼくもここでセンチメンタルなことをいってるわけじゃないんです。今までいったことも、子どもはかわいいなんてことをなぐさみにいってるんじゃないんです。真理についていってるんです。真理のために死んでもいいと覚悟しなければいけないんです、今の時代は。しかし、その真理が本当に真理であるか、たしかめないといいけない時代ですが。

きょうははんばな話をしましたけれど、はんばな方がいいんです。またつづきがありますからね。でもきょうはこれで終りにします。

(現職研究会講演)

こども動物園で

